報 告

慢性疾患をもつ幼児の集団生活における支援

一保育園勤務の看護師への質問紙調査より一

出野 慶子, 大木 伸子, 小泉 麗 鈴木明由実

[論文要旨]

慢性疾患をもつ幼児の集団生活における支援を検討することを目的として、保育園に勤務する看護師42名を対象に質問紙調査を行った。看護師の個別的な対応や配慮は、症状出現の予防、疾患・症状への対処、園児に適した保育園生活の工夫・配慮、保護者との情報交換、保育士(栄養士)との情報交換や知識の共有などであった。また、看護師が困難に感じたことは、保護者の理解不足や園児への適切なかかわりがないこと、医療設備・体制の問題、他の園児との調整に関すること、情報の共有化不足などであった。慢性疾患をもつ幼児が集団生活を支障なく送るためには、他の園児と同じような生活ができるための工夫や配慮、他の園児との調整、保護者との連携が重要であることが考えられた。

Key words:慢性疾患,幼児,集団生活,保育園,看護師

I. はじめに

近年, 医療の進歩や社会環境の変化に伴い, 慢性疾患をもちながら家庭や地域で生活している子どもが増加してきた。一般の保育園でも, 慢性疾患をもつ子どもが, 集団生活を送っている姿が比較的多くみられるようになっている¹⁾。

慢性疾患をもつ子どもは、療養行動を日々の 生活の中に組み入れて実施していくことが必要 となる。幼児の場合、自分自身で療養行動を実 施することは困難であることが多いので、周囲 のサポートが重要となってくる。また、疾患に 起因する身体状態の変化などを、的確に訴える ことは難しく、周囲の者が状態の観察を行った り、状態変化に早期に対処することが必要とな る。

このような子どもが保育園で集団生活を支障

なく送るためには、保育園側の疾患の理解や、 個別的な対応・配慮、また、保護者との連携が より重要になってくると思われる。

そこで、保育園に勤務している看護師が、慢性疾患をもつ幼児に対してどのような個別的対応・配慮を行っているのか、困難に感じていることは何かを明らかにし、慢性疾患をもつ幼児の集団生活における支援を検討することを目的として研究を行った。

Ⅱ. 研究方法

1. 対象

都内A区の公立保育園で勤務する看護師42名 (42保育園)を対象とした。A区内の公立保育 園は約60園あり、0歳児保育を実施している保 育園には看護師1名が配置されている。

Support for the Infants with Chronic Disease in Group
— A Questionnaire Given to the Nurses in Nursery Schools —
Keiko Ideno, Nobuko Ohki, Rei Koizumi, Ayumi Suzuki
東邦大学医学部看護学科(研究職)

(1000)

受付 06.11.2

採用 06.12.5

別刷請求先:出野慶子 東邦大学医学部看護学科 〒143-0015 東京都大田区大森西4-16-20 Tel:03-3762-9881 Fax:03-3766-3914

Presented by Medical*Online

[1866]

2. 方法

2006年2月に、自作の質問紙および調査への協力依頼文を保育サービス課経由で配布した。調査内容は、慢性疾患をもつ園児の概要、看護師の個別的な対応・配慮、困難に感じたこと、保護者および保育士との連携の程度とその内容などである。質問紙は無記名とし、保育サービス課経由で回収した。

なお,本研究において慢性疾患をもつ園児と は,疾患に関連した観察や医療的ケア,環境の 配慮などを要する園児とし,注意欠陥多動性障 害,ダウン症などの園児は除いた。

結果の分析は、自由記述を意味のある文節で 区切り、その内容を類似性に着目して研究者 4 名で検討し分類した。

3. 倫理的配慮

調査内容などについて、保育サービス課の了解を得た後、調査を実施した。対象者には、研究の趣旨およびプライバシーを厳守することを書面にて説明し、質問紙の返送をもって調査協力に同意が得られたものとすることを明記した。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の概要

42名のうち、39名の看護師より回答を得た(回収率92.9%)。そのうち3名は、現在および過去にも慢性疾患をもつ園児(以下,園児とする)とかかわった経験がなく、3名は質問紙の記入不備があったため、33名を分析対象とした。

看護師の平均年齢は47.1歳($SD\pm7.9$),保育園での勤務年数の平均は14.6年($SD\pm8.3$)であり,現在園児とかかわりがある者14名,現在および過去にかかわりの経験がある者8名,過去にかかわった経験がある者9名であった。

2. 慢性疾患をもつ園児の内訳

園児の疾患は、気管支喘息13名、先天性心疾 患6名、二分脊椎症3名、小児がん・腎疾患・ 食物アレルギー・筋ジストロフィーが各2名、 小児糖尿病・ウィルソン病・染色体異常・ヒル シュスプルング病が各1名であった。

3. 看護師と保護者・保育士との連携の程度

保護者および保育士との連携の程度を4段階 尺度(とてもある・ある・少しある・あまりな し)で回答を求めたところ、保護者との連携は、 「とてもある」8名(23.5%)、「ある」20名 (58.8%)、「少しある」4名(11.8%)、「あま りなし」1名(2.9%)であった。保育士との 連携は「とてもある」19名(57.6%)、「ある」 12名(36.4%)、「少しある」0名、「あまりな し」1名(3.0%)、無記入1名であった。

4. 看護師の対応や配慮

看護師の対応や配慮は、<健康状態の観察>、 <症状出現の予防>、<疾患・症状への対処>、 <与薬>、<園児に適した保育園生活の工夫・配慮>、<保護者との情報交換>、<症状悪化 時の保護者への連絡>、<保育士(栄養士)との知識の 共有>、<保育士への技術指導>、<医療職と の連携>の11項目に分類された(表1)。

このうち, <園児に適した保育園生活の工夫・ 配慮>の記述内容として「キャンドルサービ ス、焼き芋などの行事のとき、親と相談して部 分参加にするかを検討した」(気管支喘息の5 歳男児),「親は普通の子どもと同じように、と いう思いがあったが運動面などは無理があり, 他の園児と同様にできることと、できないこと を親にわかってもらうように努めた」(先天性 心疾患の5歳男児)、「食事のとき、スープはお 湯でうすめて、他児と同じようにおかわりでき るように親に提案した。(慢性腎炎の3歳男 児),「内服のために事務室に来る園児を疑問に 思った他の園児に対して、病気で薬を飲まなけ ればならないこと、飲んでいれば元気でいられ ることをきちんと説明したら理解したようで. 暖かく見守ってくれるようになった」(ウィル ソン病の5歳女児)、「プールに入る前、肛門に ストマパックを貼って便失禁しても大丈夫なよ うにした」、「ストマパックはコストが高く、病 院で相談してハルンパックに変えてみたら、う まくいった」(ヒルシュスプルング病の3歳男 児) などがあった。

表1 看護師の対応や配慮

<u> </u>	表 I 有護師の対応や配慮
	記述内容の概要
1. 健康状態の観察	・登園時の健康観察を丁寧に行う ・季節の変り目には特に注意して観察する ・顔色が観察できるようにベッドを使用
2. 症状出現の予防	・マスクを着用させる ・冷暖房の空気の流れを配慮 ・自律神経を鍛えるため、薄着や裸足保育をする
3. 疾患・症状への 対処	・水分補給 ・安静を保つ ・体位の工夫 ・排痰 ・スキンケア ・尿量測定 ・除去食のメニューを保護者、栄養士、保育士、看護師でチェックする ・除去食を間違えずに食べられるように、食事用トレイやネームプレートを工夫する ・食事のおかわりのとき、たんぱく質でないもの、塩分の少なそうなものを選び、満腹感 が得られるようにする
4. 与薬	・経口薬の与薬 ・軟膏塗布 ・気管支拡張剤のテープを貼布
5. 園児に適した保育園生活の工夫・配慮	・体調のよいときは、できるだけ戸外遊びをさせるように保育士と相談してすすめる ・キャンドルサービス、焼き芋などの行事のとき、親と相談して部分参加にするかを検討する ・食事制限のある児がおかわりする場合、スープはお湯でうすめて、他児と同じように出すなど、具体的に親に提案した ・プールに入る前、肛門にストマパックを貼って、便失禁しても大丈夫なようにした ・ストマパックはコストが高く、病院で相談してハルンパックに変えてみたらうまくいった ・内服のため事務室に来る園児を他児が疑問に思って質問してきたとき、病気で薬を服用 しなければいけないこと、服用していれば元気でいられることをきちんと説明したら理 解したようで、暖かく見守ってくれるようになった ・児が疎外感を感じないように、保育士と相談しながら可能な範囲で他児と同様な生活ができるように配慮した ・保護者と話し合いを十分に行い、児の負担を少なく、心理的配慮を心がけて他児と同様 に過ごせるようにした ・親は「普通の子どもと同じように」という思いがあったが、運動面など他児と同様なこ とは無理があり、他児と同じようにできることと、できないことを保護者にわかっても らうように努めた
6. 保護者との情報 交換	・保護者とのコミュニケーションを大切にし、児の健康状態を把握するように努める ・児の状況、治療状況、受診結果、園での感染症発生状況などの情報交換を行う ・連絡ノートを利用して家庭での状況を把握する ・必要時、面談を行って情報交換をする ・いつでも何でも相談したり、要望が出せるような母親との関係作り
7. 症状悪化時の保護者への連絡	・発作が起きたときは早めに連絡をとり、受診をすすめる
8. 保育士(栄養士) との情報交換	・児の状態に変化があったときに連絡してもらう ・保育中の気になる点について報告してもらう ・担任の保育士とは定期的にミーティングを行い、些細なことでも話し合う ・保護者から受けた児の状況についての報告
9. 保育士(栄養士) との知識の共有	・疾患についての勉強会を行う ・病気のこと、治療のことなど必要があれば折に触れて情報提供する ・疾患に関する観察点、留意点を確認する
10. 保育士への技術 指導	・バルンカテーテルの取り扱いについて指導 ・ハルンパックからの排尿の操作を指導 ・緊急時に備えて心肺蘇生法の訓練を行う
11. 医療職との連携	・時々、保護者とともに医療機関で児への配慮のアドバイスを受ける

5. 看護師が困難に感じたこと

看護師が困難に感じたことは、〈保護者の理解不足や園児への適切なかかわりがないこと〉7名、〈医療設備・体制の問題〉7名、〈疾患による症状・状況に起因したこと〉4名、〈園児の身体的苦痛を軽減しにくいこと〉4名、〈他の園児との調整に関すること〉3名、〈情報の共有化がうまくいかないこと〉3名、〈保護者への連絡〉3名、〈医療との連携〉3名の8項目に分類された(表2)。33名中、6名(18.2%)は「特になし」と回答した。

このうち、〈保護者の理解不足や園児への適切なかかわりがないこと〉の記述内容として、「親が病気に対する理解があまりなく、子どもに無理をさせる」、「症状が悪化し、母親に受診を勧めるが応じてくれず、園児の苦痛が長引いた」、「園で配慮できることに対して、母親はあまり関心がなく、具体的な方法を提案すると同意する状況であった」などがあった。また、〈情報の共有化がうまくいかないこと〉の記述内容としては、「入園当初、保護者より健診結果を詳しく伝えてもらえず、保育に支障があった」、

「受診結果など,直接保護者から聞く機会が少なく,必要な情報を後から知ることがあった」 などがあった。

Ⅳ. 考 察

1. 他の園児と同じような生活を送ることができる ための工夫や配慮

看護師は、便失禁の可能性がある園児に対して、他の園児と一緒にプール遊びが楽しめるように工夫したり、そのための経済面も考慮していた。また、食事制限がある園児に対しては、他の園児と同様におかわりができるような工夫や、環境の調整が必要な園児に対して、可能な範囲で行事に参加できるように配慮を行っていた。このように、慢性疾患をもっていても、同年齢の子どもが体験することを、健康状態を悪化させない範囲で体験できるように工夫・配慮することは、豊かな集団生活となるうえで、重要であると考える。

94%の看護師が保育士との連携を「とてもある」あるいは「ある」と回答しており、園児の体調や家庭での状況などの情報交換、勉強会や

表2 看護師が困難に感じたこと

n = 26 (重複同答)

		記述内容の概要
1.	保護者の理解不足や園 児への適切なかかわり がないこと(7名)	・親が病気に対する理解があまりなく子どもに無理をさせる ・医師からの説明を保護者が十分に理解できていない ・症状が悪化し、母親に受診を勧めるが応じてくれず、園児の苦痛が長引いた ・園で配慮できることに対して母親はあまり関心がなく、具体的な方法を提案すると同意する状況であった
2.	医療設備・体制の問題 (7名)	・医療設備がないので緊急時にどう対応するか ・保護者より吸入器を預かって欲しいと申し出があった ・医療行為ができないので保育時間が短くなる
3 .	疾患による症状・状況 に起因したこと(4名)	・喘息発作が増強し、母親を待っている間緊張した ・泣いてチアノーゼが出現 ・歩行が不安定で配慮を要した ・感染症発生時の保育体制
4.	園児の身体的苦痛を軽 減しにくいこと(4名)	・保健室がないので安静が保てない・医療行為ができないので園児に負担がかかる
5.	他の園児との調整に関すること(3名)	・プールのとき便失禁のおそれがある・園児が事務室に来て内服していることについて他児が疑問に感じて質問してきた
6.	情報の共有化がうまく いかないこと (3名)	・入園当初、保護者より健診結果を詳しく伝えてもらえず保育に支障 ・受診結果など直接保護者から聞く機会が少なく、必要な情報を後から知ることあり
7.	保護者への連絡(3名)	・保護者に連絡が取れない
8.	医療との連携 (3名)	・医師からのアドバイスがなかった
	その他 (1名)	・保護者との信頼関係から築かなければならない(異動したばかり)

打ち合わせ会などによる知識の共有,技術指導を実施していた。看護師が他職種とうまく連携を図っていくことは, 園児に対して, 一貫した適切なかかわりができることにつながると考える。

荒木ら²は、保育園保健において期待されている看護職の役割の一つとして、救急時の対応や、さまざまな健康問題を抱える子どもたちの個別性に対応できる専門的な看護援助を挙げている。今回の調査においては、看護師が困難に感じたことの内容として、看護師自身の疾患に対する知識・技術不足に関する内容はみられなかった。対象となった看護師の保育園での平均勤務年数となった看護師の保育園看護での平均勤務年数を報告している4.1年³⁾や7.3年²⁾を大きく上回っている。保育園での経験年数が豊富であることが、園児の個別的な健康問題に対して工夫や配慮をしたり、他職種と適切な連携が築けていた一因とも考えられた。

2. 他の園児との調整

内服のために事務室に来る園児について,他の園児が疑問をもったとき,その理由を理解しやすい言葉を用いて看護師が説明したことにより,他の園児の理解や協力が得られた状況があった。山内ら⁴も,二分脊椎症をもつ園児において,疾患に関することを保育士が他の園児にわかりやすく伝えたことにより,他の園児の協力が得られた事例を報告している。このように,疾患に関連した状況や個別的対応について,他の園児が疑問をもつような場合,その理由を納得できるように説明することは,園児同士の関係を保つうえで重要であると考える。

一方,個人情報保護法のもと,疾患に関連することを他の園児に話すことは,プライバシーの問題にも関係してくる。子どもの疾患について,周囲に知られたくないと考えている保護者もおり⁴,どのように他の園児との調整を図ることが,園児にとって集団生活を支障なく送るうえで最良なのかを,保護者とよく相談することも必要である。

今回の調査では、慢性疾患をもつ園児が、他の園児からいじめや差別を受け、看護師が困ったという内容はなかった。坂井ら50の調査でも、

アレルギーを持つ園児が食べ物を制限していること,またはアレルギー症状がでることが原因で,他の園児からいじめにあうことは,ほとんどなかったことを報告している。しかし,看護師や保育士の個別的対応や配慮を,「特別扱い」として他の園児が受け取り,園児同士の関係が阻害されないように,他の園児へのかかわり方に留意することは大切だと考える。

3. 保護者との連携

看護師が困難に感じたことのなかで、最も多かったのは、保護者の理解不足や園児への適切なかかわりがないことであった。保護者の思いと看護師の判断がすれ違っている状況もあり、他の園児と同じように活動することが、園児にとっては身体的・精神的に負担になる場合もあり得る。保育園での園児の体調や活動状況を的確に保護者に伝えることは、保護者が子どもに適切なかかわりができることにつながると考える。

看護師が保護者の疾患に関する理解不足を感じている一方で、慢性疾患をもつ子どもの親が保育園へ要望していることは、疾患に関するる。保護や理解であったという報告のもある。保護者との非話しやすい雰囲気をつくり、保護者とのに関する必要を出る。それと同時に、園児に関する必要者にとれる。それと同時に、園児に関する必要者に提供する機会にもなると考えられる。保護者とのもりなどを保護者と一緒に検討するなど、保護者との連携を図っていくことは、慢性疾患を達っていても、集団生活のなかで健全な成長発達を送げていくために重要であると考えられた。

V. おわりに

慢性疾患をもつ幼児が、集団生活において「みんなと同じようにできる」と感じながら他の園児と遊んだり、活動に参加できるかどうかは、周囲の人々のかかわり方や配慮によると思われる。看護師は専門職として健康状態を悪化させないような判断のもと、他職種や保護者との連携をとりながら、慢性疾患をもつ幼児への個別的対応・配慮ができる立場にある。この個

別的な対応や配慮を,他の園児が「特別扱い」として受け取るのか,それとも慢性疾患をもつ子どもに対して,幼いなりに理解や協力ができるようになるのかは,看護師のかかわり方次第であると思われた。

今後は、慢性疾患をもつ幼児の家族への支援 についても考えていきたいと思う。

謝辞

多忙な中,調査にご協力いただきました看護師の 皆様,ならびに関係者の方に深く感謝いたします。

なお, 本研究の要旨は第53回日本小児保健学会 (2006年, 甲府) において発表した。

引用文献

1) 加藤忠明. 保育所における子どもの成長発達 とヘルスケア. 小児科臨床, 2005;58 (4): 501-507.

- 荒木暁子,遠藤巴子,羽室俊子他.岩手県の保育園保健の実態と看護職の役割.岩手県立大学看護学部紀要,2003;5:47-55.
- 3) 木村留美子,棚町裕子,田中沙季子他.保育園看護職者の役割に関する実態調査(第1報) 一保育園看護職者の役割遂行状況と看護職者に対する保育士・保護者の認識―.小児保健研究, 2006;65(5):643-649.
- 4) 山内尚子, 奈良間美保, 塚本雅子. 二分脊椎症 患児の就園時の適応状況と母親のストレス. 日 本小児看護学会誌, 1999;8 (2):112-117.
- 5) 坂井堅太郎, 荒木寛子, 阿南和夏子他. アレル ギーを持つ園児に対する保育所における保育状 況. 保健の科学, 2001; 43(4): 329-334.
- 6) 扇 千晶,内田雅代,竹内幸江他.慢性疾患の子どもをもつ親の会に対する親の認識および専門職へのニーズの検討―小児糖尿病とアトピー性皮膚炎の子どもをもつ親の会への調査を通して―.長野県看護大学紀要,2003;5:53-62.